

【ポスター発表】

社会福祉施設や教育機関での継続的な実習について —実学臨床教育プログラムの評価—

○ 東北福祉大学 佐藤 泰伸 (7758)

阿部 利江 (東北福祉大学・7795)、千葉 伸彦 (東北福祉大学・6188)

キーワード：継続的な実習、プログラム評価、スーパービジョン

1. 研究目的

現在、多くの大学で実践的な教育活動がおこなわれているが、社会福祉施設等で継続的に実習をおこなえる教育環境は数少ない。本学は教育環境を生かして社会福祉施設や教育機関で継続的に実習を積み重ねることが可能である。しかし、定期的な振り返りを通して社会福祉・教育分野の学びを深めていくことが望ましく、これまでも実習の振り返りを重視することが大切であると考えてきた。しかし、「目標を設定することが難しい」「実習内容がマンネリ化している」などと語る学生が多数見受けられた。

この教育プログラムを履修する学生のこれまでの学習の振り返りをもとに、プログラムの評価をおこなうことを目的とする。そして、この教育プログラムの質的向上のための視点を抽出することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

学生の社会福祉施設での実習ばかりに意欲が高まり、実習内容を振り返ることやこれからの取組みを理論的に整理する時間が疎かになる傾向がうかがえた。そのため、定期的なグループ学習に記録を持ちより学生間で実習内容や姿勢を確認しあうことや、教員の指導を受けることで記録(振り返り)の意義を深め、学習意欲の向上につながると仮説を立てた。専門職養成課程における実習内容とは異なるが、多くの学生が将来専門職を目指しているため、継続的な実習が自己の成長を感じられる教育プログラムであるべきではないか、これが今回の視点である。

2) 研究の方法

平成23年度、教育プログラムを履修している学生118名を対象とした。これまでの学習を振り返るシートを講義時に配布した(平成24年2月実施)。振り返る内容は、①教育プログラムのイメージ(印象)、②1年間の学習実態、③教育プログラムへの期待と不安、④これから教育プログラムで学びたいことについて設定した。

3. 倫理的配慮

本研究で得られた回答は、統計的に処理をおこない個人が特定されないよう配慮するこ

と、また、回答することにより教育プログラムの評価に影響が及ばないことを伝え同意を得た。

4. 研究結果

1) 目標や課題を振り返ること

教育プログラムⅠとⅡの実習では、実習後に実習先で振り返りシートを記入することが決められている。これは自分の実習を振り返るだけでなく、疑問に感じたことを職員に質問することもできる。そのため、目標や課題を振り返る

表1 目標や課題を振り返ること (N=108)

		I	II	III	全体
有効	できなかった	0.0	3.0	2.9	1.9
	できなかったらう	15.0	27.3	26.5	22.4
	できたらう	62.5	60.6	55.9	59.8
	できた	22.5	9.1	14.7	15.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0

機会は多い。しかし、教育プログラムⅡやⅢを履修する学生のなかには、記録用紙の記入が疎かになり提出されないこともあり、「できた」と回答する割合も低い。また、実習のマナー化が振り返ること自体にも影響していると感じる。

2) 教育プログラムへの期待

「自分を成長させられそう」と期待する学生が最も多い。他の「視野が広がりそう」や「現場を理解できそう」と比べても圧倒的である。大学での講義や演習ばかりでなく、社会福祉施設や教育機関という現場で学べる経験は、何らかの自分の成長につなげたいと期待する思いを感じる。しかし「期待はない」と回答する学生もおり、プログラムの内容の検討が必要である。

表2 教育プログラムに対する期待 (N=108)

		I	II	III	全体
有効	自分を成長させられそう	52.5	48.5	50.0	50.5
	現場を理解できそう	12.5	12.1	9.4	11.4
	現場実践ができそう	12.5	3.0	9.4	8.6
	視野が広がりそう	12.5	18.2	15.6	15.2
	卒業後に役立つそう	7.5	12.1	.0	6.7
	たくさんの人と関われそう	.0	6.1	12.5	5.7
	期待はない	2.5	6.1	3.1	1.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0

5. 考察 (今後の課題)

学生が教育プログラムの意図を定期的に確認し、目標を意識した実習への支援体制が必要である。そのために、実習先の職員と教員が担うスーパービジョンの役割は大きいだろう。学生が個々に学習支援計画書を作成し、その計画書を基に継続的な実習を積み重ね、幅広い視野を身に付けながら体験を理論に結び付けていくことが求められる。